

喘息および慢性咳嗽患者における誘発喀痰上清中ムチン濃度の検討

陣内牧子 新実彰男 松本久子 伊藤功朗 山口将史 松岡弘典
大塚浩二郎 小熊毅 竹田知史 中治仁志 三嶋理晃
(京都大学 医学部 呼吸器内科)

【背景・目的】過分泌は気道疾患における重要な病態生理学的特徴の1つである。喘息患者の喀痰中ムチン濃度を定量測定した検討がFahyらにより報告されているが(Am J Respir Crit Care Med 2001)、他の気道疾患に関する報告は見られない。今回、喀痰中のムチン量を喘息および慢性咳嗽患者で測定し比較検討した。

【方法】誘発喀痰上清中ムチン濃度をFahyらの方法に準じてELISA法で定量した。

【結果】喘息38例、咳喘息25例、SBS8例、GER5例、健常人11例における喀痰中ムチン濃度は、それぞれ $665.4 \pm 544.0 \mu\text{g/ml}$ 、 $326.9 \pm 313.4 \mu\text{g/ml}$ 、 $696.8 \pm 669.8 \mu\text{g/ml}$ 、 $425.4 \pm 656.5 \mu\text{g/ml}$ 、 $212.0 \pm 167.1 \mu\text{g/ml}$ であり、喘息では健常人 ($p=0.006$)、咳喘息 ($p=0.006$) と比較し、またSBSでは健常人 ($p=0.03$) と比較しそれぞれ有意に高値であった。喀痰症状と喀痰中ムチン濃度との間に関連を認めた。

【まとめ】喘息、SBSにおいて喀痰中ムチン濃度が増加していた。誘発喀痰上清中ムチンの定量は気道疾患の病態解析に有用な可能性がある。